

令和6年度 地域循環共生圏づくり支援体制構築事業

中間支援振り返りシート（2025.3）

活動団体の活動におけるテーマ

『サステイナブルツーリズムを取り入れた滞在型観光の促進—環境・観光・子育て教育・定住を統合した取り組み』

活動団体の活動地域：北海道豊富町

活動団体名：豊富町観光協会

中間支援主体名：北海学園大学

活動計画（概要）

地域循環共生圏の構築を通じてありたい地域の姿

地域課題を克服する視点は、①**観光産業の拡大と閑散期の解消**によって雇用の創出、地域資源を活かした地域経済循環の強靱化、②**コミュニティでの対話の場づくり**、③**教育や子育て**において外部からの刺激により、子どもたちの地元愛を育む、である。

地域に必要なプラットフォームの体制や仕組み

町内には、本事業に関わる観光や教育子育ての分野において、事業者やNPOなどの「点」は20～40程度存在している。**キックオフイベント（7/3開催）**やワークショップを通じて、これらの「点」を「面」に広げていく。

将来的には地域おこし協力隊制度等を活用し、活動団体内部（または外部）に**コーディネーター**を設けることを目指す。

ローカルSDGs事業として取り組む内容

本事業のキックオフイベントやワークショップ等での議論から生み出されていくものである。活動団体が実現したい事業は、豊富町との関わりを深めてもらい、また、住民にとっても持続可能な地域づくりにつながる、**地域活動への参画や交流等を行うプログラムの企画運営**である。

〔対象〕湯治客、長期滞在の企業職員、研修を行う大学生等

地域の現状

豊富町は、急速に進展する少子高齢化や地域の人口減少、経済の縮小という過疎問題に直面し、地域課題の解決に向けて地域産業の創出と維持発展が欠かせない。主要産業の観光業は**通過型観光**であり、宿泊者数の増加、冬期の閑散期の解消が課題である。その打開策が、地域資源を活かした**ワーケーションや湯治といった滞在型観光**の潜在的な掘り起こしである。

2026年度末の状態目標

【活動団体】

- ・大学生等が参加するサステイナブルツーリズムを取り入れた滞在型観光の事業を実装する。
- ・プラットフォームに参加しているステイクホルダーのつながりを維持・発展させ、地域循環共生圏づくりを継承していく。

【中間支援団体】

- ・サステイナブルツーリズムを取り入れた滞在型観光の事業の実装に向けて支援を継続していく。
- ・大学教育として中間支援者の育成プログラムを運用していく。

2025年度末の状態目標

【活動団体】

- ・サステイナブルツーリズムを取り入れた滞在型観光の事業を検討し、実施を試みる。
- ・プラットフォームに参加しているステイクホルダーのつながりを発展させ、先進事例の教訓を活かした地域循環共生圏づくりを検討する。

【中間支援団体】

- ・サステイナブルツーリズムを取り入れた滞在型観光の事業の実装に向けて、円滑な遂行を支援する。
- ・大学教育として中間支援者の育成プログラムを検討する。

2024年度末の状態目標

【活動団体】

- ・キックオフイベント開催による仲間・チームを作り、地域課題の共有とあり方、活動目標の練り上げを実施
- ・大学生向けの教育体験・滞在を実施し、当該地域の産業・生活・教育の実情を知ってもらい、豊富町の課題点や既存資源の活用法を新たな目線から助言、明らかにして行く事により、地域づくりのキーポイントを発掘し今後の地域づくりに発展させる。

【中間支援団体】

- ・キックオフイベントを開催し、ファシリテーター役として地域課題の洗い出しや解決策の議論、今後の活動計画の共有等の議論を円滑遂行
- ・上記イベントで出た論点や疑問点に対応するため、先進地での現地調査を行い、ノウハウの取得、中間支援事業をパワーアップさせる。

■見立て

豊富町内での観光産業、教育・子育て活動、環境保全活動などでは多様な主体が取り組み、所定の成果をあげている。しかしながら、これらの活動は、領域毎に取り組まれているいわば「**点の状態**」であり、分野横断の「**面の状態**」に**再構築**すると、より効果的で相乗的に地域課題の解決に向けて取り組むことができる。

観光協会は、適切な支援を得られると、異分野の教育・子育ての要素を絡めて活動を拡げていく可能性を有している。

■打ち手

本事業に関わる担い手は町内に多数存在している。「面の状態」に拡張するための仲間づくりが課題である。そこで、中間支援の打ち手は2つを準備している。

- 1) **大学教員は専門的な知見**をオーダーメイドで提供する。また、地域での**コーディネートやファシリテーター**を担う。
- 2) **大学生**は豊富町に1-2週間滞在して**体験活動に従事**し、産業や生活、教育の実情を知り、住民や関係者と交流し、**コーディネーターやファシリテーター**を担う。

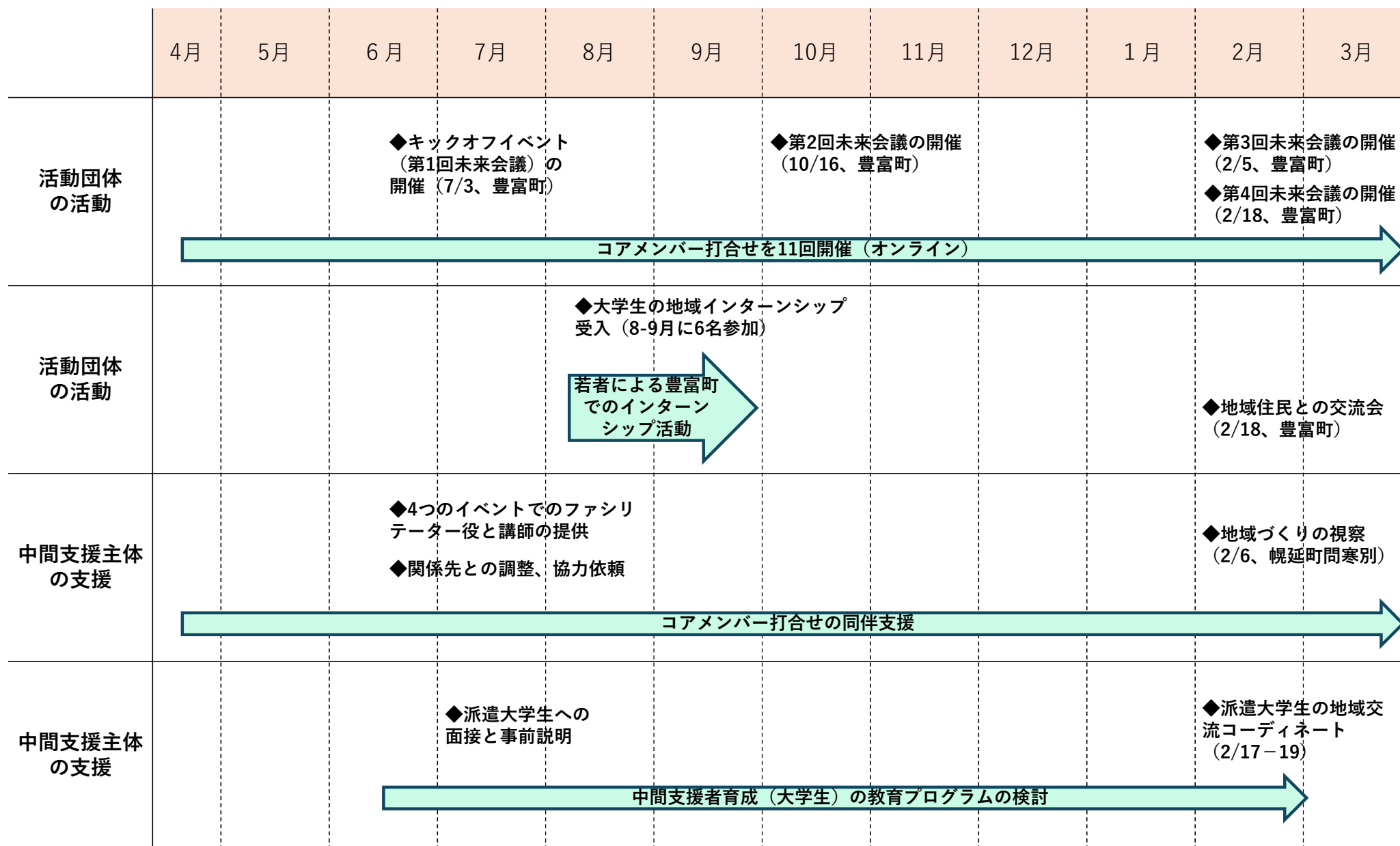
■中間支援機能の強化・振り返り

本事業に関わる専門性はオーダーメイドで対応する必要があるため、関連の先進例の調査によるノウハウを蓄積し、実践的な知見の提供を目指す。また、大学生が、中間支援者を現場で担えるように教育・指導し、未来の中間支援者を養成していく**人材育成プログラム開発**を目指す。

この事業を通じて中間支援機能を獲得できれば、豊富町で研究と大学教育の実践の場として継続的にサポートに入る。そして、地域資源を活かした地域課題の解決、**人をつなぐ役割**を他の自治体でも貢献していく。

活動・支援のプロセスの振り返り

■R6年度活動・支援内容



活動・支援のプロセスの振り返り

■今年度、地域循環共生圏づくりのポイントとして注力したアクションサイクル①

「ワクワクとよとみ未来会議」の開催（4回実施）

中間支援主体の支援

● 上記アクションサイクルの取組を活動団体が進めるにあたっての見立て

豊富町観光協会は、適切な支援が得られると、異分野の教育・子育ての要素を絡めて活動を拡げていく可能性を有している。

● 具体的な支援内容（打ち手）

大学教員の専門的な知見を提供した（教育・子育てセミナーの講師）。「未来会議」では、参加者間の意見交換を円滑に進めるために、ファシリテートを行った。

● 打ち手による活動団体の変化（意識・行動・活動の進捗）

これまでに培ってきた人間関係をもとに共生圏づくりの中心的な役割を担いつつある。

● 中間支援主体としての気づき・成長

参加者は、他者の意見を共有したことで、地域づくりに楽しく関わろうとしている。

活動団体の取組

● 活動名・時期

「ワクワクとよとみ未来会議」の開催
（7/3、10/16、2/5、2/18）

● なぜそれを実施したのか（実施目的）

本事業に関わる担い手は町内に「点の状態」として多数存在している。課題は「面の状態」に拡張するための仲間づくりであり、まずは率直な意見交換の場を設定し、プラットフォームの形成を目指した。

● 実施したことによって共生圏づくりにどのような変化が起きたか（活動団体自身の変化・周囲の変化等の共生圏づくりに関わる進捗）

4回の未来会議では、ワークショップによる参加者間の意見交換を行ったことで、地域の課題や魅力を洗い出すことができた。とくに、教育や子育てが地域課題と認識されており、今後の活動に活かしていく。

活動・支援のプロセスの振り返り

■今年度、地域循環共生圏づくりのポイントとして注力したアクションサイクル②

大学生地域インターンシップの実施

中間支援主体の支援

- **上記アクションサイクルの取組を活動団体が進めるにあたっての見立て**

地域には大学生が普段はいないため、若者の発想や感性が地域に新たな刺激を生む可能性がある。

- **具体的な支援内容（打ち手）**

地域インターンシップに参加する学生の募集と選考、事前説明を行い、6名を派遣した（北海学園大、大阪成蹊大、久留米大）。

- **打ち手による活動団体の変化（意識・行動・活動の進捗）**

受入側は、大学生と交流することで様々な気づきや刺激を受けた。

- **中間支援主体としての気づき・成長**

派遣される大学生と受入れる事業者のニーズをマッチさせる難しさを感じており、次年度は中間支援の改善と成長につなげたい。

活動団体の取組

- **活動名・時期**

大学生地域インターンシップの実施（8-9月）

- **なぜそれを実施したのか（実施目的）**

豊富町の主産業・生活・教育について体験し、若者の感性を活かした多種多様な観点からアイデアを生み出し、地域づくりへ活かしていく。

- **実施したことによって共生圏づくりにどのような変化が起きたか（活動団体自身の変化・周囲の変化等の共生圏づくりに関わる進捗）**

受入事業者（温泉施設、旅館、酪農、教育、自然ガイドなど）にはインターンシップの意義と課題を認識してもらえた。大学生による湯治滞在者へのインタビューによって、湯治を軸とした「滞在型観光」の可能性を示すことができた。

活動・支援のプロセスの振り返り

- （特に前2スライドの支援を実施するにあたり、）今年度、力を入れて取り組んだ中間支援は？（中間支援機能チェックリスト.xlsxより上位3つを選んで記入）

協働ガバナンスの項目	中間支援機能	項目（番号）	支援をしたタイミング等
運営制度の設計	プロセス支援	2（2）	コアメンバーの打合せ
協働のプロセス	プロセス支援	3（7）	「ワクワクとよとみ未来会議」でのワークショップ
チェンジ・エージェント機能	問題解決提示機能	8（1）	コアメンバーの打合せ

● 共生圏づくりを進めるために、活動団体の能力をどう引き出せたか

豊富町観光協会は、適切な支援を得られると、異分野の教育・子育ての要素を絡めて滞在型観光の活動を広げていく可能性を有していると思えた。「ワクワクとよとみ未来会議」での対話の場づくりと域外大学生という刺激により、地域活動への参画や交流等を行う「サステイナブルツーリズムを取り入れた滞在型観光」の事業のタネが育まれつつある。

● 中間支援主体として向上したと思う中間支援機能

ワークショップや打合せなどで、住民や関係者と意見交換・交流して、地域で解決すべき課題や要望を抽出し、的確な企画立案への支援が向上した。また、「地域インターンシップ」を実施したことで、この事業の意義や効果、派遣する大学生の選考基準・方法や注意すべき点を把握できた。

● R6課題だと感じたこと

今年度の活動を通じて、全体を通じて必要とされる専門的な知見を適格に把握することの難しさと、大学生の地域インターンシップにおいて、派遣される大学生と受け入れる事業者のニーズをマッチさせることの難しさを感じている。

地域循環共生圏づくりに向けた次のアクション

- 地域循環共生圏づくりのために、どのような中間支援機能を発揮できるか。R7～中間支援主体として今後どのようなになりたいか。

大学が中間支援者として提供できる機能は、1) 大学教員がもつ専門性やノウハウを地域社会に提供すること、2) 地域社会とのコーディネートや橋渡し役を担うこと、3) 大学生（北海学園大学など）を派遣し地域体験へ従事させること、4) 大学生を将来の中間支援者に育成することの4つを考えている。

次年度の活動では、1-3)の機能をより効率的・効果的な成果が出せるように内容を改善させていく。4) については、大学で体系的な教育プログラムを開発するように検討を進める。

- 活動団体がアクションサイクルを回せるようにするための次年度の見立て・打ち手（具体的な支援策）

目指していた地域プラットフォームの土台を構築できたと考えているが、次年度も新たな参加者を拡げる必要がある。また、今年度は観光や教育・子育てなどの地域課題を洗い出し、参加者の間で「共通の理解」を共有したが、次年度は個別課題を絞り込み、ローカルSDGs事業を具体化させる必要がある。次年度も「膝詰めの対話」による「信頼の構築」を進め、「協働ガバナンス」を深化させていく。中間支援者としては、引き続きイベントの企画と運営、大学生の地域インターンシップのプログラムの実施、先進事例の調査・視察先の選定などを支援していく。

- 地方・全国事務局にサポートしてもらえると嬉しいこと

ワークショップなどでのファシリテーターを引き続き協力をお願いしたい。また、「事業のタネ」を具体化していけるように、仲介を含めて、他地域の実践例などを紹介していただきたい。